

195 アヒラーマジムン

今生^{なまいち}ちよーいねーやー、幾^{いく}ちがないらわからんしがや、うぬ人^{ちゆんちや}達がや、若^{わか}さいに、砂糖^{さとう}しーねーや、樽皮^{たるが}や、煮^にちえーる砂糖^{さとう}や樽皮^{たるが}んかい詰^ちみーせーや。うぬ樽皮^{なふあ}や那霸^{なふあ}んじ買^こいたんでいよー、あぬ、渡地^{わたじ}ぬ橋渡^{はしわた}てい。

あんさーい、うり、なー棒荷^{ぼうに}さーに担^{かた}みていよー、大里^{うーざとうんちゆ}人ぬ、島^{しまどうない} 隣^{りん}ぬ友^{よし}達^{たち}と一^{まじゆん}緒^ご、昼間^{ひるま}から、砂糖^{さとう}や二丁^{にちよう}なー担^{かた}みてい、向^{あま}んじ売^うやーに、帰^けいねー樽皮^{たるが}担^{かた}みてい来^{ちゆー}しよー、なー夜^ゆなとたんているばー。
夜^{ゆる}なていさくとう、くぬ中郡道^{なかくんごう}から通^とたくとうや。
道端^{みちばた}んかい、女^めぬ洗^あ髪^{がみ}し、道^{みち}や後^{くし}なち、立^たつちようたんでいるばー。

あんさーに、うぬ大里^{うーざとうんちゆ}人ぬよー、
「いえーひるましむん。うまんかい、美^{ちゆらめなく} 女^めぬ立^{たち}ちゆ

いま生きているとね、幾^{いく}つになるのか分^わからないがね、その人^{ひと}たちの、若^{わか}いときに、砂糖^{さとう}を作^{つく}るときには、樽^{たる}をね、炊^くいてある砂糖^{さとう}は樽^{たる}に詰^ちめるでしよう。その樽^{たる}は那霸^{なふあ}で買^かつて来^きたそうだよ。あの、渡地^{わたじ}の橋^{はし}を渡^{わた}て。

そうして、その時^{とき}にもう、砂糖^{さとう}は棒^{ぼう}で担^{かた}いでね、大里^{うーざとうんちゆ}の人^{ひと}が、隣^{りん}村^{むら}の友^{よし}達^{たち}と一^{まじゆん}緒^ごに、昼^{ひる}ごろから、砂糖^{さとう}を二丁^{にちよう}も担^{かた}いで、向^あこうで売^うつて、帰^けりには樽^{たる}を担^{かた}いで来^きる時には、もう夜^よになつていたそうだよ。

夜^よになつていたので、そこの中郡道^{なかくんごう}を通^とつたそうだよ。すると道の側^{わき}に、女^めが洗^あい髪^{がみ}して、道^{みち}を後^{あと}ろに、立^たつていたそうだよ。

それで、その大里^{うーざとうんちゆ}の人^{ひと}がね、

「あれーふしぎなことだ。そこに、きれいな女^めが立^{たち}つ

んでーやー」でい言に、うりし、

「いえー、うんぐとうーや、見だんどー。しらんふーりーし通るわ」んでいさくとうやー、今度また、うぬ女ぬよ、同間隔離りていよー、いかな、追付てい、顔見んでいやーに、足速みていんよ、ぜつたい追付うはんでいるばー、ちゃー同間隔離りてい。

あんするむんぬ、うぬ女ぬ、見らんない、今度また、アヒラーマジムンない、あんさーに、前からアヒラーがよー、なーグルグルグル歩ちやくとうよー、なーかんたるむんでいやーによ、石取ていやー、うぬアヒラーんかい、投ぎてーるふーじ。投ぎたくとう、ぱつとう無んなやーにやー。

なーあんすんでいしーねーなー、ちよーどう報得川ぬ高嶺入口ぬや、報得川ぬ橋来くとうやー、

「あつさみよーなー、今日やいふーな物見じやーに、うり追付んでい急じやるむんぬ、でいーなー、うまうていタバクちきていから行かやー。村わじかるやつ

さい」んでい言やーに、んまをうてい、樽皮ん下ち、休てい、タバク吸ちゆんでいさくとうやー、んまんかいよ、御香火ぐわーぬ有たんでいるばー。

あんさーに、

「ぬーが、魂ぐみさーがやー。魂ぐみうさぎてい、去てーはやー」んでい言やーに、うぬ友達ぬ、大里人ぬや、チシリぐわーんかい、タバク入りやーに、タバクちきーんでいさくとう、パーラみかちゃんていよー。

なー見舞しーが行じやくとうよー、なー、背中からまーから爛ていよー、大火傷し、あんさーになー、芋ぬ葉よー、バナナぬ葉よー、うり敷ちよー、うりんかい寝んでいなー、はきさみよーそーたんてい。

「うれー本當に有たらくとうどー。私たーが若さいにぬ話どー」んでい、私達祖父おじーが言みせーたん。

ているよ」といって、それで、

「おい、そんなのは、見るもんじゃないよ。知らんふりして通りなさい」というと、するとつきにはまた、その女がね、同じ間隔ずつ離れて、どんなに、追いついて、顔を見ようとしても、足を速めても、とても追いつけずに、ずっと同じ間隔離れていたそう。

そうなのに、その女は、見えなくなつてしまい、つきにはまた、アヒラーマジムンになつて、そして、前からアヒルがね、もうグルグルグルグルと歩いているので、こんなものと言つて、石を取つて、そのアヒラーに投げたそうだよ。投げたので、ぱつと無くなつてしまつて。

それでそうしているうちに、ちよーど報得川の高嶺入口のね、報得川の橋まで来たので、

「ああもう、今日は変な物を見てしまつて、それに追いつこうとして急いだのだが、さあもうここで、タバコをつけて一服してから帰つて行こうね。もう村はあ

とわずかだし」と言つて、そこで、樽もおろして休憩して、タバコを吸おうとすると、そこに、線香の火があつたそうだよ。

それで、

「何だ、魂グミをしたのかね。魂グミをして、行つてしまつたんだね」と言つて、その友だちの、大里の人は、キセルに、タバコを入れて、タバコに火をつけようとする、パツと音がしたそうだよ。

後でお見舞いに行つてみるとね、もう、背中じゅうあつちもこつちもただれてね、おおやけどして、それでも、芭蕉の葉ね、バナナの葉ね、それを敷いてね、その上に寝て、痛いとうなつていたそう。

「それは、ほんとうに有つたことだよ。私たちの若いときの話だよ」と、うちのおじいさんがおっしゃって